

新刊

KAWAJI SHINKICHI

新刊

バシュッ

部屋の中に、なにかが弾けるような音が響いた。

その音のした場所には何やら見たこともないような動物がいた。

ただの毛並みの良い犬のようにも見えるが、しなやかに歩く姿は猫のようにも見える。

「ヌワーォ」

その動物は鼻を伸ばして上を向くと、高らかに吠えた。その鳴き声は犬と猫の鳴き声が混ざったような奇妙なものだった。

「どうやら成功したみたいね」

白衣の女性が、動物にむかって、こっちへおいでと手招きをした。

それを察して、その動物は従順に白衣の女性のもとへ歩いてきて足もとでとまった。

女性が動物の鼻先に右手をかざすと、すっと後ろ足を折りたたみ床に座った。

「よしいいこね。お手」

つづけて女性は右手を差し出す。

それを見た動物は差し出された手に自分の前足を器用にのせた。

その後女性は、ふせ、おかわりとさまざまな芸を続けざまに動物に試した。そのたびにその動物は器用にこなしていった。

すると、女性はおもむろに動物を抱き上げ、力いっぱい天井に向かって放り投げた。一瞬、驚いたように身をよじったが、空中で反転して、何事もなかったかのように音も立てず着地した。

「ようやく完成したわ」

満面の笑みが女性の顔に浮かんでいる。

「名前は何にしようかしら、ポチとタマだったのだから、ポマかしら、変な名前ね」

女性は上機嫌に笑って、ポマの頭を撫で回した。

そしてポケットから携帯電話を取り出して、どこかに電話をかけた。

「ひさしぶりねカナ。ちょっと遊びに来ない？」

「こんにちわーせんぱい」

ようやく来たわ。全く遅いってありゃしない。

「ようこそ、いらっしゃい」

「きゃーせんぱい、ペットかってるんですか？」

カナはめざとくポマを見つけ、チッチッチと舌を鳴らした。ポマを呼んでいるのだろう。

ポマはカナの呼びかけに気づくと、しなやかな足取りでカナの元に来た。

「これなんてイヌですか？」

「違うわ」

「ネコですか？」

「それも違う」

「じゃなんなんですかあ？」

なぜかカナは泣きそうな顔をしている。こういうところが腹がたつ。

「なんだと思う」

カナはポマを撫でながら、しきりに観察している。

「イヌだとおもったんだけどなあ。でもネコっぽくもあるんだよなあ。うーんなんだろう。せんぱい、わかりません。おしえてください」

カナの澄んだ瞳が私の方に向けられた。

その瞳につい吸い込まれそうになる。

「正解は、犬でも猫でもあるのよ」

「どういうことですかあ」

甘ったるい声が私の神経を逆なでする。

「この動物は私が作ったの、犬と猫を混ぜて。しかもただ混ぜただけじゃないわ、お互いの優れた性質を併せ持ってひとつになるの、犬の社会性、凛々しさ、勇敢さと猫のしなやかさ、猫の可愛らしさ、好奇心を持っているのよ」

「せんぱいがつくったんですか？このこ。すごいです」

まるで、自分のことのようにカナははしゃいだ。

上下に揺れる顔に似合わず豊満な胸がまた目障りだ。

「犬と猫だけじゃないわ。私が発明した装置はどんなものでも二つのものを掛け合わせることができるの。二つのものは掛け合わされて、それぞれの良いところだけが残り、悪いところはきえる」

「せんぱい、ノーベルしょうとかもらえるんじゃないですか？」

キラキラと尊敬の眼差しをカナは私に向ける。

つややかな黒髪。

スラリとのびた手足。

透き通るような肌。

同じ女性として隣に立ちたくないタイプ。

悔しいが、見た目で私が勝てる場所は、ない。

全く恨めしい。

しかし、頭脳ならば。

装置の完成した今となっては、このような素晴らしい素材が近くにいたことは幸運以外の何者でもないだろう。

「それにしても久しぶりね。とりあえず座って」

は一いと返事をしながら、カナはソファというにはごつくて怪しい機材のついた椅子に何の疑いもなく座った。私も、その対面にある同じ椅子に座った。

もうすぐ、カナの美貌は私のものになる。

私はスイッチを押した。

バシュッ

ここはどこだろう。

目が覚めて、まずそう思った。

気絶でもしてしまったのだろうか、確かめるように辺りを見回す。特に、体にはおかしいところはないようだ。

何をしていたんだっけ？

少し思い悩んで、先輩の家にあそびに来ていたことを思い出した。

「先輩」

声をあげてみるが、どこからも何の返事もない。

「先輩、どこに行ったんですか」

家中を探して見たが誰もいなかった。

いたのは、先ほどまでかわいがっていた、先輩が創ったという動物だけだった。

結局、先輩は見つからなかった。

見つかったのは、先ほどまで先輩が来ていたと洋服と白衣だけだった。

「どこにいったんだろうね」

私が不安になっているのに気づいたのだろう。動物は私の方に歩いてきて心配そうに私を見ている。

「本当どこいったんだろうね。ポマ」

○気シール

「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ」

学校からの帰り道、公園のベンチにおかしなおじさんがいることに気づいた。

横に大きなカバンを置いて、大きな声で呼び込みをしている。

いったい何を売っているんだろう。

いつもママに「知らない人には近づいては行けません」と口すっぱく言われているから、いつもなら絶対に近づこうとはしないんだけど、今日に限って、なぜかそのおじさんが気になってつい話しかけていた。

「おじさんこんにちは」

「お、坊主。いらっしゃい」

おじさんはぼくを気安く坊主と呼んだ。

「ここで何をしてるの」

「シールを売っているんだ。それもただのシールじゃない」

大げさに周りを確認する素振りをしてから、まるで友だちどうしが秘密を共有するような様子でぼくの耳元に口をよせて囁いた。

「人気シールさ」

「人気シール？」

「そう、このシールを胸に貼ると、何もしてないのに人気が出るんだ」

胸にはると人気ができる？何を言っているんだろう。

「どういうこと？」

「言った通りさ。このシールをぺたりと胸に貼るんだ。そうするとたちまち君は人気者さ」

「本当？」

「ああ、本当さ」

そう言って、おじさんは自分の胸を指さした。

「これが人気シールさ」

おじさんの胸にはシールが貼ってあった。かわいい人の顔のイラストが描かれている。

「最近は何事にもなった。なかなかお客さんに近づいてもらえなくて困ってるんだ。けどこのシールを貼れば万事解決。本当は何もしなくてもお客さんのほうから話しかけてきてくれる」

おじさんは得意満面の顔をしている。

なるほど、このおじさんに話しかけてしまったのはそういうことだったのか。ぼくは納得した。

「このシールをちょっと胸に貼れば、怖い先生にも叱られない、友だちだってどんどん増える。大好きなあの子、いや女の子ならみんな自分に夢中になるのさ」

ぼくはそのシールを手にとって見てみた。見た目は何のへんてつもないただのシールだ。このシールを貼るだけで人気者になれる。ちょっと欲しいな。

けど、シールの裏についていた値札にぼくはびっくりする。そこに書かれている値段は、も

のすごく高くて、子供のぼくにはおこづかいとお年玉を五年分貯めても買えるかどうかわからない。

「高いよ、とても買えやしない。まけておくれよ」

「おじさんも商売だからな。すまんな坊主」

おじさんはすげなかった。

けど、落ち込んだぼくを見て、おじさんは横にあったカバンの中を探り別のシールを取り出してくれた。

「こういうのもあるんだ」

おじさんが新たに取り出したシールには、犬のイラストが描かれていた。

「これはどういうシールなの」

「これは犬気シール」

「犬気？犬気ってどういう意味？」

「人に好かれるのが人気が出るってことだろう？犬に好かれるから犬気だ」

犬に好かれるシールか。でもぼくには不要、むしろ迷惑なシールだ。

ぼくのリアクションがあんまりよくなかったから、おじさんはまた別のシールをカバンから取り出した。

「ひょっとして犬は苦手か？だったらこれはどうだ。猫気シールだ」

「猫に人気ができるの？」

目を輝かせて聞くと、おじさんは、試しにつけてみるかい？とシールを手渡してくれた。

「自分で張らないと効果がでないんだ」

ぼくは言われたとおりに自分の胸にシールを貼ってみた。

実を言うと、それまでシールの効果に半信半疑だったんだ。だけどシールをつけたらすぐに、公園のあちこち、いたるところから次から次へと野良猫がでてきて足もとにやってきたんだ。猫たちはわれさきにとぼくの足に頬を擦りつけようとしている。まるで天国だ。

「すごいやおじさん、猫気シールはいくらなの」

おじさんが言った値段は「人気」シールよりは安かったけど、でもやっぱりぼくにはとても手が出ない。

「すまんな坊主。こればかりは商売だから」

そう言っておじさんが胸のシールをはがす。するとぼくに群がっていた猫たちは夢から覚めたかのように散り散りにいなくなってしまった。

「ねえ、ぼくにも買えるのはないの？」

「坊主にも買えるやつか」

おじさんはカバンの中をごそごと探し、一つのシールを取り出した。

「このシールなら、値段はいらないな」

「ただなの？」

「ああ、つくってみたはいいが、欲しがる人がまずいない。ただであげよう」

「きゃー」

教室に悲鳴がこだました。突然の闖入者の登場にクラスメートはおろか、先生さえも混乱の渦に包まれた。

みんな驚いてる。ぼくはみんなのあまりのパニックぶりに笑ってしまう。

カバンの中の家から持ってきたスリッパを取り出す。そして、心を落ち着かせ闖入者にまっすぐ振り下ろした。

「もう大丈夫だよ、みんな」

そう声を上げると、クラスメートたちの尊敬の眼差しがぼくに集まった。先生もぼくを頼もしそうに見ている。

その眼差しを受けながら、ぼくはこっそりと胸に貼っていたシールを剥がした。

あいつらがこれ以上集まってきたら大変だ。

胸からはがしたシールをポケットに隠す。そのシールにはかわいらしいゴキブリのイラストが描いてある。

それは、おじさんからもらった「ゴキブリ気」シール。

「できたぞ」

隣の実験室から博士のすっとなきょうな声が聞こえてきた。

そのとき、助手のタナカは後輩の新婚生活を茶化していて、サトウは茶化されていた。

「またくだらないものでも発明したんだろうよ」

タナカは博士の叫びを無視しようとしたが、茶化しがすぎたかタナカの話にうんざりしていたサトウはこれ幸いにと実験室に向かってしまった。

しょうがなくタナカもついていく。

「なんだこりゃ」

実験室のドアを開けてそこにあるものを見て、タナカとサトウは啞然としてしまった。部屋の中央にこんもりと何かが積み上がっている。中に人がすっぽりと入ってしまいそうなほど大きい。

「いったいどうしたんだ、これ」

「タナカさん、ちょっと見てくださいよ」

サトウが積み上がったものの一部を手にとって見せた。サトウの目は点になっている。

サトウの手の中には一万円札があった。それも何枚も。

山のほうへ視線をもどす。それは一万円札の山だった。これまで見たこともないほどの大量の1万円札。

それが1万円札だと認識するととたんにインクの匂いが充満したような気がした。

「どうじゃ、すごいじゃろう」

二人が一万円札の山に見とれていると、部屋の奥、山の向こうから博士が現れた。

「いったいこれはどうしたんですか？博士」

「よくぞ聞いてくれた」

そう言うと、博士は一万円札の山をかき分け、山のちょうど真ん中あたりから鉢植えのようなものを取り出した。一本だけひょろっとした幹が鉢から生えている。

「これじゃ」

「鉢植えですか？」

「ああ、世紀の大発明、金のなる木じゃ」

「金のなる木？」

改めて観察すると、ひょろっとした幹からはたくさんの細かい枝が伸び、ほとんどは先に何もつけていないが、中には一万円札が付いているものがある。

「じゃ、この一万円札は全部その鉢から生えたんすか？」

「ああ、そうじゃ。昨日の晩に種を植えて水をやって今朝来てみたらこうじゃ」

タナカはあらためて目の前の一万円札の山を見た。これがあの鉢植えから生えたというのか。

「信じられないです」

となりでサトウも呆然としている。

とても信じられる話ではない。しかし、目の前の光景はそれが現実であることを物語っている

その二人の様子を満足気にみていた博士が言った。

「欲しいか」

二人の目の前に差し出された博士の手には小さな種があった。

「マジっすか？」

「いいんですか？」

「ああ、いいとも。わしは太っ腹なのじゃ」

博士は豪快に笑った。

次の日、博士が実験室で昨日手に入れた一万円札を数えているとタナカが部屋に駆け込んできた。

「大変っす、博士」

「どうしたんじゃ」

「昨日もらったあれ、金のなる木なんかじゃないっす」

「なんじゃと。一万円札は実らなかったのか」

「ええ実らなかったっす。だけど」

「だけど？」

「お札は実らなかったんすけど、別のものが実ったんす」

「別のもの？なんじゃ」

一瞬タナカは恥ずかしそうな顔をした。

「美少女フィギュアが」

「美少女フィギュア？」

「じつは俺、美少女フィギュア集めるの趣味なんす。その資金に当てようとおもって鉢に種を植えたんすよ。そしたら朝起きたらすごいことになっていて」

タナカの部屋には、昨日の一万円札のように美少女フィギュアの山ができていたという。

「いったいどういうことじゃ」

博士はうでを組んだ。金のなる木を発明したと思っていたら、タナカの植えたものには金はなかった。そのかわり美少女フィギュアが実ってしまった。

「ひょっとして、植えた人間が一番欲しいものなる木なんじゃないですか？」

「なるほど」

「博士の場合はお金が欲しかったからお金が実った」

「お前の場合は美少女フィギュアが欲しかったと」

どうやら、自分の発明は想像以上のものだったようだ。博士の鼻息が荒くなった。

「お金で買えない幸せもある、なんてかっこつける奴もいるが、そういう奴にとってもちゃんと望むものが実るといわけじゃ。何が実るか知れたもんじゃないがな。これはまさしく幸せのなる木じゃ」

「そうっすよ、すごい発明っすよ」

世紀の大発明だ、と二人は抱き合って喜び合った。

ひとしきり喜んだあと、博士がふと思い出したように言った。

「ところで、サトウくんの木には何が実ったかの」

博士のその言葉を聞いて、タナカがふと我に返った。

「どうしたんじゃ？」

なぜだかタナカは青ざめている。

「まずい。ひじょーにまずいっすよ」

自身の望むものがただで山ほど手に入れられるというのに何がまずいというんだ。不審に思っているとタナカが言った。

「サトウの奴、昨日言ってたんすよ」

「なんて言ってたんじゃ」

「ぼくはひとりっ子でさみしかったんでたくさん子供が欲しいです、って」

快盗ルピンの正体

怪盗ルピンからの挑戦状が警察に届いたのは万博が始まる一週間ほど前だった。

『万博開催期間中に冥王星の石をいただく』

冥王星の石とは、去年の夏、人々に感動を与えつつ帰還した無人口ケット「うみねこ」が16年の歳月をかけて地球へ持ち帰ったものだ。今回の万博の目玉として会場に展示されている。自らは燃え尽きながらも採集カプセルを地球に届ける「うみねこ」の勇姿は、連日メディアで報道されたため世間の関心は高い。

冥王星の石を盗まれるわけにはいかない。盗まれることは、すなわち万博の失敗を意味する。

しかし、どうしたものか。警備担当責任者である警部は頭を抱えていた。

怪盗ルピンは凄腕の泥棒。これまで幾度も煮え湯を飲まされてきた。

毎回、ご丁寧に送られてくる挑戦状。それに合わせて警察も警備を手厚くしているにも関わらず、ルピンはそれを毎回かいくぐってくる。

挑戦状に嘘が書かれていた事は今までない。それでもなおルピンにやられ続けている現状は完全なる警察側の敗北を意味していた。

怪盗ルピンについてわかっていることは、男性であること、犯行が過去20年にわたって行われていることからおそらくもういい年であろうということ、そして、偶然にも前回の犯行時に防犯カメラに写った顔写真だけだ。

しかしその写真は不鮮明であり、そもそもルピンは毎回変装してあらわれるため、顔写真はあまりあてにできない。

「はあ」

警部はため息をついた。これまで怪盗ルピンの事件で責任者をしてきた先輩刑事たちの顔が浮かぶ。彼らは今、遠い北の地もしくは南の地にいる。警備の失敗は、本署での居場所がなくなるということを意味する。

「失礼します。警部お客様です」

警部が弱気になっていたとき、部下の刑事が対策室に見知らぬ人物を連れてきた。

「私、こういうものでございます」

差し出された名刺には警備会社の研究所の名前が記されていた。

「いったいどういうご用件で」

「快盗ルピン対策でお困りとお聞きしましたのでご協力できればと思ひまして」

そうやって研究員は持っていたカバンから何かを取り出し警部の方に差し出した。

「こちらを御覧ください」

それはすこし大きめのブローチのようなものだった。

「この装置は、私どもの研究所で開発した顔認証システムを改造したものです。普段は入室管理などに使っているものを、万博の環境に合わせて調整し、小型化しました」

「顔認証システムですか」

「ただの顔認証システムではありません。このシステムは独自のアルゴリズムを採用し対象者が

どんなに変装していてもその顔を認証、つまりは見破ることができます。」

「しかし、こんなに小さくても大丈夫なのですか？」

「ええもちろん。試してみますか？」

研究員はカチャカチャと手元のノートパソコンを操作し始めた。警部の顔で使ってデモンストレーションを行うという。

「そのブローチを見ていただけますか」

言われた通り警部がそのブローチ大の装置をじっと見つめていると、研究者のノートパソコンからピピッと音がした。

「このように、短時間でもしっかりと認識できます」と研究員はパソコンの画面を見せた。

見ると警部の顔写真の横にでかでかと「OK」の文字が見えた。

「怪盗ルピンのデータは大丈夫なのですか？」

「ええ、前回得られた顔写真があるそうですね。先ほど拝見させていただきました。多少不鮮明ですが入力データとして充分です」

こんなに小さくて認識能力も高い。あと問題なのは数。

「どれぐらいの台数、準備できますか」警部は気になっている点を聞いてみたが

「1000、いや2000は準備できるでしょう」その答えは満足の行くものだった。

2000台。十分な数だ。それだけの台数が用意できるのであれば会場のいたる所に設置できる。

今回こそ怪盗ルピンを逮捕できるかも知れない。

しかし研究員の顔がそこで少し曇った。

「ただし、正確に判定するには条件が一つあるんです」

「条件？いったいそれは？」

「この装置は、虹彩認証を根幹のシステムとして採用しています。瞳の中にある虹彩のパターンは2歳を迎えるころからほとんど変化しないことが知られています。ゆえにこの装置に対して変装などしていても無意味なわけです。しかし、逆に言えば虹彩をきちんとカメラでとらえることが出来なければ判定はうまくできません」

「つまりはどういうことです」

「簡単に言うと判定対象にカメラ目線になってもらう必要があります」

防犯カメラに対してカメラ目線になってもらう。それは防犯カメラの存在を相手に知らせるということだ。あからさまに防犯カメラを設置してしまっただけでは相手を警戒させるだけ。快盗ルピンは凄腕の泥棒だ。見え見えの防犯カメラに引っかかるやつではない。防犯カメラはできるだけ隠して設置したい。が、それでは目線をとることは難しい。

研究員はそのように考えていたのだろう。自分たちの技術に絶対の自信を持ちながら、絶対と言い切れないもどかしさを感じている。

しかし、警部は言った。

「なんだ、その程度のことですか。それならば大丈夫です。任せて下さい」

ご協力ありがとうございます、しかしできるだけ極秘でことに当たりたいので、と研究員を帰

すと、警部は部下にむかって言った。

「急いで、万博の衣装担当を呼んできてくれ」

万博が開催されて数日経ったある日、新聞の一面に『怪盗ルピン逮捕』の文字が踊った。装置を提供した研究所にも警察からお礼がしたいとの連絡が入った。

先日装置を持ってきた研究員が対策室に入ると、警部は満面の笑みで出迎えた。

「ご協力ありがとうございました。お陰でにつくき怪盗ルピンを逮捕できました」

二人は固い握手を交わした。

「逮捕おめでとうございます。こちらこそお力になれて光栄です。しかし、いったいどんな手を使ったのですか？」

「こういうわけです。おーい連れてきてくれ」

部下の刑事が連れてきたのは、万博会場で案内をしていると思われるコンパニオンだった。

注目すべきはその制服だ。万博会場にふさわしくないほど胸元がざっくりとあいている。男性ならば誰もがくぎづけになってしまい、女性ならば誰もが眉をひそめてしまうだろう。

研究員は目のやり場に困った。しかし、その魅惑的な胸の谷間をついつい見てしまう。

すると、「ピピッ」と聞いたことのある音がした。

「こういうことです」

警部がノートパソコンをどこからか取り出し、自慢気にその画面を見せてきた。

画面には研究員の顔とその横に「OK」の文字が踊っていた。

「男ならば誰でも見てしまいますからね」

コンパニオンのあらわになった胸元のちょっと上、鎖骨の少し下ぐらいに、ペンダントのようにチェーンにぶら下がって例の装置があった。

「なるほどこういうことですか」

「大成功でしたよ。まあ、コンパニオンたちには大不評の作戦でしたけどね」

ガッハッハと警部の下卑た笑いがこだました。

「しかし、こういうのも何ですけど、なんか残念ですね。怪盗ルピンがこんな罠にはまってしまいうなんて」

研究員はすこし残念そうに言った。

それを受けて警部が誇らしげに言った。

「怪盗ルピンといえども、ただのオジサンだってことですよ」

○社がロボットを発売した。

その名も「カスィエフ」

家事と名のつくものはすべてやってのける万能人型家政婦ロボットだ。

凹凸のない寸胴鍋のような体にホースのような腕、まるでマジックハンドのような手と見た目は昭和のマンガに出てきそうなやぼったさ。

しかし機能は高性能。掃除、炊事、洗濯、買い出し、その他雑用、すべての家事をそつなくこなす。

主婦の大きな味方。与えられるは大いなる称賛。のはずだった。

「また苦情か」

カスィエフの研究所ではまたため息がひとつ。ため息の主はカスィエフを発明した博士。

博士を見ると、目の前のデスクには山のような書類が今にも崩れそうになっている。すべて、カスタマーセンターに寄せられたお客様からの苦情の報告書だ。

博士は山のとっぺんから書類を数枚つまみとった。その拍子にすこし雪崩が起きてしまって何枚か床に落ちてしまったが、博士はそれを無視した。

『窓の棧にホコリが残っていた。掃除機能が貧弱だ』

『シャツのアイロンがけに時間がかかる。もっとスピーディにして欲しいか』

『片付けられたものが見つからない。もっとわかりやすく片付けて欲しい』

『料理の味は問題ないが、盛り付けがいまいち。料理は見た目も重要な要素だ』

博士のため息のボリュームが上がる。

全部取るに足りないものばかりではないか。自分たちが家事をしていたなら見過ごすようなものばかり。もし同じ事を夫に言われでもしたら、こいつらは「主婦の大変さも知らないで」と怒り出すに違いない。

まったく、こいつらの勝手な言い分は腹がたつ。

しかし。

しかし同時に、悔しさもあった。

博士は研究室にこもりカスィエフの改良を始めた。

そこまで言うのならやってやろうじゃないか。

半年後、カスィエフ2が完成した。

見た目の変化はない。そこまでの余力がなかった。

だが、機能面では新たに学習機能を搭載。

学習機能によって日に日にその家庭のニーズに細かにこたえるようになり、一ヶ月もたつと何の文句も言われぬ完璧な家政婦となる。

カスィエフ2は発売直後は静かな売れ行きだったが、ちょうど一ヶ月たったころから家事を完璧にこなすカスィエフ2の実力がじわじわと口コミで広がり爆発的なヒット商品になった。

いまでは博士の机の上にはひとつの書類もない。

「はっはっはっ。どうだ。見たか、カスィエフの実力を」

口やかましい主婦たちを黙らせてやったぞ。

しかし博士は満足しない。

カスィエフ2完成後まもなく、また実験室にこもり始めた。

「これでやっと、見た目の改善に取りかけられるわい」

博士が考えていたのは次の一手。それはカスィエフの見た目。

これまで機能面の向上を優先していたため、外見は機能上必要な最低限のデザインしかしていない。

機能も外見も最高のロボットを創る。人間と比べても遜色ない、いやそんじょそこらの人間よりもかわいく美しく、そして完璧に家事をこなす最高の家政婦ロボットを創るのだ。

博士は使命に燃え、カスィエフ3の開発を始めた。

開発は困難を極めた。しかしカスィエフ2の発売から半年後、博士はカスィエフ3をついに完成させた。

家事を完璧にこなす機能面はそのままに、外見は大幅に向上。

そのルックスは人気の女優にも負けない。研究所内で運用試験をしていると、それを見た男性研究員はもれなく振り返ってしまうほどだ。

「どうだ。完璧なお手伝いロボットが完成したぞ。今以上に爆発的に売れるに違いない」

博士は自信満々にカスィエフ3を世に送り出した。

カスィエフ3は、あのカスィエフ2の後継機でしかもかわいいということもあり、メディアにはこれまで以上に大々的に取り上げられ華々しいデビューを飾った。

称賛だって、これまで以上、最高のものを得られるはずだった。

しかし、一ヶ月後、博士の机にはまた山のような書類があった。

称賛の声ではない。すべてカスィエフ3に対する苦情だ。

博士は書類の一部を手に取り目を通した。

『すました顔して、完璧に家事をこなすのが気に食わない』

『旦那が私よりもカスィエフの方をかわいがってしまう。どうしてくれるんだ』

ドアのチャイムが鳴った。

ユキエが部屋のソファで本を読み込んでいたところだった。

時間はもう日付が変わろうとしている。こんな夜遅くに誰だろうか。気にはなったが、ユキエは読んでいた本に目を戻した。

しかし、いつまでまってもチャイムが止まらない。ドアの向こうにいるであろう人物は帰る気配を見せない。

ユキエは本をテーブルに置いて立ち上がった。仕事柄、目立つようなことはできるだけ避けたい。

ドアの向こうにいたのは、ごく普通のサラリーマンのような姿をした男だった。

「夜分おそくに申し訳ございません。ユキエ様でいらっしゃいますか」

相手の思いの外ていねいな態度がうさんくさい。

ユキエは何も言わずただ男を睨んだ。すると男は、スッと名刺をさし出した。

「私、こういうものでございます。耳よりな話をもってまいりました」

ユキエの目は名刺に書かれた会社名の部分にとまった。

『感情銀行』？聞いたことのない会社だ。

「大々的に宣伝してはいないのであまり世間には知られておりませんが、契約者のみなさまにはご好評をいただいております」

どうやら訪問販売や契約のたぐいのようなようだ。いつものユキエならそこでドアを閉めただろう。だけどユキエはそうしなかった。

『感情銀行』いったい何の会社なのだろうか。

ユキエは「どうぞ」と男を玄関に招き入れた。

男はありがとうございます、と礼を言いすぐに商品の説明を始めた。

「わが社では感情を、通常の銀行のように貯金することができるのです。感情を貯めて、好きなときに引き落とすことができるのでございます。もちろん貯めている間その感情には利子がつきます」

「どういうこと？」ユキエは眉間にシワをよせた。

「たとえばわが社の一番の人気商品『たのしさ貯金』の場合ですと、日々の生活の中で、なにか楽しいことがあったときにこちらの装置についている」そう言って男はカバンから、判子ほどの大きさのものを取り出した。「青のボタンを押して頂きます」それには青色と赤色の二つのボタンがついていた。

「楽しいことならば、どんな小さなことでもかまいません。その時に楽しいと感じたらボタンを押していただく。そうすると、ユキエ様の口座に『たのしさ』が貯金されます」

楽しさが貯金される？

「楽しさってあの楽しさ」

「あの楽しさでございます」

「じゃ、楽しさを貯金すると、貯金するときと使う時で2回味わえるの？」

ユキエが質問すると男は慌てて訂正した。

「ご説明が足りなくてもうしわけありません。残念ながら、貯金した時の楽しさはボタンを押したその瞬間に消えてしまいます」

なあんだ。つまらない。

明らかに失望した様子のユキエを見て男はあわてて続けた。

「しかし、貯金していただいた『たのしさ』には先ほどご説明させていただいたように利子がつきます」

「利子？」

「お金の銀行と同じ意味の利子でございます。そもそも『銀行』と会社名につけさせていただいたのも、お客様にこのシステムを簡単に理解してもらえるためです。ただ、お金の銀行とは利子率が違います。お金の場合と違って、お貯めいただいた『たのしさ』はそう時間をおかずに2倍、3倍となります」

男はカバンからパンフレットを取り出し、ユキエの前に広げた。『たのしさ貯金』についての、利子率など詳細なデータが書かれているようだった。

「ほんの小さい楽しさを貯めていただき、たとえば悲しくてどうしようもないときなどに、こちらの赤いボタンを押していただくと『たのしさ』を引き落としていただくことができます。すると、悲しい気持ちもふっとびすぐに立ち直ることが出来るでしょう」

なるほど。『たのしさ貯金』とはすなわち感情をコントロールできるシステムなのだな。とユキエは理解した。好きなときに楽しい気持ちになることができるのは確かに便利かもしれない。

しかし、「遠慮しておくわ」ユキエは断った。

「そうでございますか」

「わたし、日常の中の小さな楽しさってけっこう好きなの。小さな楽しさを集めてまで大きな楽しさを味わいたいとは思わないわ」

ユキエは男から露骨に視線をそらして、わざとらしくため息をついた。

だが、そんなユキエの様子にもまったく動じず、男はカバンの中からさまざまなパンフレットを取り出した。

「それではこんなのはいかがでしょう。『うれしさ』『すがすがしさ』『きもちよさ』などなど、ユキエ様のような素敵なかたに対して少々はばかれるのですが『いやらしさ』なんてものもございます」

ユキエの冷たい視線にも、男の商品説明が止まることはない。

ユキエは深くため息をついた。男はまだまだ帰りそうな気配はない。

早く帰ってくれないかしら。まだ本も読まないといけないというのに。

「あっ」

「どういたしました？」

「『かなしさ』はあるの？」

「『かなしさ』、でございますか？」

「そう、悲しいの『かなしさ』よ」

「あるにはあります。しかし、なにぶんその性質上、契約者ゼロの不人気商品でございます」

「ええ、けっこうよ。わたしが契約者第一号になってあげるわ」

男は本当によろしいのですか？と念を押してきたが、ユキエはかまわずにその場で『かなしさ貯金』の口座を契約した。

男が帰った後、ユキエはまたソファにもどり、テーブルに置いていた本を手を取った。

近々クランクインする映画の台本だ。

映画製作会社の50周年記念というふれこみの大作で、想像を絶するきびしい逆境のなか、それでも健気に生きる女性の物語だ。

ユキエはそのヒロイン役に抜擢されていた。

「ちょうど良かったわ。あまり泣いたり、悲しい演技には自信がなかったのよね」

ユキエは台本を閉じテーブルに置いた。

おもむろに立ち上がり、足の小指がテーブルの足に当たるように、狙いすまして足を振った。

「痛っ」

ユキエはすぐさま青のボタンを押した。

「とうとう成功したぞ。タイムマシンの完成だ」

いかめしい機械のなかから博士があらわれると、それを出迎えた助手がその偉業をたたえた。

「おめでとうございます博士。過去への旅はいかがでしたか？」

助手からの祝福に博士は満面の笑みで答えた。最終実験のための過去へのタイムスリップを終えたところだった。

「ああ、快適だったよ。何の問題もなく時間旅行ができた。これで温めてきた計画を実行することができる」

「温めてきた計画？ですか？」

たずねる助手に、博士はタイムマシンから降りると研究室の本棚からとある本をとりだした。

「これを見てくれ」

それは科学史に関する本で、博士が開いたページにはあの有名な逸話が記されていた。

『アイザック・ニュートンは畑仕事をしているときに木から落ちるリンゴをみて万有引力の最初の発想を得た』

「ニュートンの有名な逸話ですね。これがどうかしたのですか」

「実はな、私の先祖はニュートンの友だちだったらしいんだよ」

「それがどうしたのですか？」

「私の計画はこうだ。タイムスリップして、そのご先祖さまのところへ行く。そして『リンゴが木から落ちたのは万有引力のせいだ』と教えるんだ」

助手は首をひねった。

「博士、どういうことですか？申し訳ないですが言おうとしていることがよくわからないのですが...」

「君も勘の悪い男だな。ご先祖さまに万有引力について教えるんだ。そうするとどうなる。万有引力の発見者はニュートンではなくご先祖さまということになる」

「まあ、そうなるのですかね？」

「とすると、私はどうなる。偉大な科学者の末裔ということになる。こんな貧乏な研究室で研究費に困ることもなくなるというわけだ」

果たしてそんなにうまくいくだろうか。助手がそう思っている間に博士は過去に行く準備をすすめている。

「さて善は急げだ。早速行ってくる。帰ってくるのが楽しみだ」

そう言うと、博士はタイムマシンに乗り込み消えた。

と、思ったらすぐにタイムマシンが出現した。

タイムマシンからは疲れた様子の博士が降りてきた。

「博士、どうしたんですか？もしかしてタイムスリップ失敗ですか？」

「何を言っているんだ、君。タイムスリップはまったくもって成功だ。ただ単純に過去から現在に戻るときに、ここから出発した時間の直後に帰ってきただけだ」

「そうですか。じゃ計画は成功したんですね。それにしても浮かない顔をしているようですが。ご先祖さまがみつからなかったんですか」

「いや、ご先祖さまはすぐに見つかったよ。だご先祖さまにたいしてこういうのも何だが大変なバカでな。万有引力が何たるものを理解させるのに大変な時間がかかってしまった」

博士の話によると、ご先祖さまをみつけてから万有引力をレクチャーするのに半年もかかってしまったそうだ。

「だが私のレクチャーでヤツは完全に理解したはずだ。結果は成功、大丈夫だろう。さて、現在はどのように変化したかな」

博士は満面の笑みで、先ほどの科学史の本を読みだしたが、すぐにその顔がくもりはじめた。

いぶかしんだ助手が横から覗くと先ほどのページがほんの少しだけ変わっていた。

『アイザック・ニュートンは、気が狂った友人が発した”リンゴは地球が引っ張っているんだ”という言葉聞いて万有引力の最初の発想を得た』

神の行動指示書

男は手元の指示書を見つめた。

『○月○日、○△交差点を左折する』

とうとう最後の指示だ。

指示の通り交差点を曲がると、そこには見覚えのある紳士がたたずんでいた。出会ったときと変わらない上品なスーツを身にまとっていた。

男に気づいた紳士は、顔に笑みを浮かべながら丁寧に頭を下げた。

「お久しぶりでございます」

「お久しぶりです。あなたのおかげで私は成功することができました」

男と紳士の出会いは一年前にさかのぼる。

そのとき男の人生はどん底だった。手持ちの金は底をつき、周囲の人間はみな離れていった。

もうたくさんだ。

電車にとびこんでやろう。男は焦点の定まらない目で駅をさまよっていた。

その視界にふと見覚えのあるものが入ってきた。駅構内の壁に大きく掲げられた雑誌の広告だった。大手出版社が発行している経済雑誌のものだ。

クボタだ。

数カ月前まで男と一緒に仕事をしていて、そして男から全てを奪っていった男。その満面の笑みの中には「スーパーコンピューターで世界を切り拓く！」とある。いろいろ手広く始めたようだ。

クボタの顔を見て怒りがこみ上げてこないと言えは嘘になる。しかし復讐する気力はとうに消え失せていた。死んで呪ってやろう、そんな思考しかできなくなっている自分が笑えてくる。

男は力ない足取りで券売機に向かった。なけなしの金で入場券を買うため、ホームで電車にぶつかるために。

そのときだった。紳士に出会ったのは。

紳士は男に話しかけた。

「幸せになりたくはありませんか」

見知らぬ人間の不躰な質問がカンにさわった。

「何者だ、お前は。消えろ」

しかし、男の剣幕を意に介さず、紳士は話をつづけた。

「不審にお思いになるのはしょうがありません。しかし、死ぬのはお待ちいただけませんか？あなたにはせねばならないことがまだありますよ」

そう言って紳士は一枚の紙を渡した。紙には一番上に無機質なフォントで『行動指示書』と書かれていた。

「騙されたと思って、そこに書いてあることをやっごらんなさい」

そう言うと、紳士は男の前から姿を消した。

今考えると、なぜこんなうさんくさいものに従う気になったか不思議だ。しかし、今はそのときのきまぐれに感謝している。

『行動指示書』に記載された行動は、いずれも簡単であるけれどもいやに具体的なものばかりだった。

『○月○日に△△公園のベンチに座る』であるとか、『○月○日に駅前の立ち食いそば屋でたぬきそばを食べる』であるとか。

しかし、それらは男が普段ならやらないことばかりだった。

指示書に書かれた単純な行動を一つ一つこなしていく。そのたび、男の生活はよくなっていた。

指示を半分ほど実行したころ、男は社会に復帰し人間らしい生活をとりもどした。

「クボタすまないな」『行動指示書』が最後に近づいたころ、男は自分をどん底におとし入れたかつての友人を見下ろしていた。

果たしてあの紳士は何者だったのだろうか。男は自分に起こった奇跡の数々を思い出してあの紳士は神様なのかもしれないと半ば本気で思っていた。

指示書の最後には、『○月○日、○△交差点を左折する』という指示が書かれていて、それにあわせて行動指示書の代金が書かれていた。

男は手に持ったカバンをそのまま紳士にわたした。『行動指示書』の代金だ。金額は指示書に記載されていた通り。

「こんなに安くてよろしいんですか？」

「何をおっしゃっているのですか」

紳士はおかしそうに笑っている。

「あなたが今お支払いいただいた金額は、私とお会いしたときには、高く支払えるはずがないと思っていた金額ではないですか」

紳士はカバンを開け、金額通り入っていることを確認すると、「では」と軽い挨拶をしてその場を立ち去ろうとした。

「すみません」

男はあわてて紳士を引き止めた。

「あなたは何者なんですか？」

男の声に紳士は立ち止まり、振り返った。

「あなたは選ばれたのです」

選ばれた？男は紳士の顔をじっと見つめ、次の言葉を待った。

「運命というのは、ほんの少しのことで変わります。あなたはすでにご経験されたはずです。交差点でいつもと違う道に行く、立ち食いそば屋でいつもは食べないたぬきそばを食べる。そんなささいなことで人生が変わっていくのを」

男は手元の『行動指示書』を見つめた。人生を変えてくれた紙切れを。

「世界にとって有益とわれわれが判断した人間を幸せにする、そうすることで世界を再生させる。それがわれわれの仕事なのでございます」

男は紳士の言葉に興奮していた。やはりこの紳士は神なのだ。

自分は神に選ばれた人間なのだ。

「きっともうお会いすることはないでしょう」

紳士はそう言うと、男の前から姿を消した。

「ただいま戻りました。実験終了です」

上品なスーツを着た男が部屋に入ってきた。

その部屋の中にはすでに一人の男がいた。研究員のように白衣を着たその男は、中央に配置されているコントロールパネルに向かってなにか入力作業をしている。

「どうだった」

コントロールパネルの画面を見つめたまま白衣の男が言うと、スーツの男は手元のカバンを広げて中身を見せた。カバンのなかにはぎっしりと札束が詰め込まれていた。

「金を渡すとき、渋ったか？」

「いえ、全然。むしろこんなに安くてかまわないんですか？と仰ってくれましたよ」

「上出来だな」

男の手は休まずに、コントロールパネルに何かを入力している。

そのコントロールパネルは少し離れたところに存在するスーパーコンピュータにつながっていた。コンピュータは数千基のユニットからなり、世界のさまざまな事象が変数として設定されている。その性能は公表されている世界一位のスーパーコンピュータの数千倍ほどはあるだろう。目的は未来予測シミュレーション。

「シミュレーション通り目障りなクボタもつぶれてくれましたしね」

スーツの男はコントロールパネルに腰掛け笑いを噛み殺すように言った。

「ああ、新しいシミュレーション結果ではクボタがわれわれを脅かす確率はなくなった」

コントロールパネルの画面にはたくさんの数字が踊っている。

その画面を見つめて、白衣の男の顔に不敵な笑みが浮かんだ。

「もうすぐだ。我々の望む世界まで」

白衣の男のすぐ横で、コントロールパネルに搭載されたプリンタがかたかたと何かを印刷していた。

プリンタから少しはみ出した印刷中の紙の頭には無機質なフォントで『行動指示書』と書かれていた。

「今おかえりですか」

家までもう少しというところで話しかけられた。声の主は隣に住むハカセだった。

ハカセというのはこの界隈での彼に対するあだ名だ。彼は、人当たりの良い老紳士で、技術者として会社勤めして、定年退職した今では自宅で発明活動にいそしんでいるらしい。

「ハカセはご散歩ですか」

「実は新しい発明品が完成したんですよ」

ハカセはそう言うと、手にさげていた紙袋から小さいクッションのようなものを取り出した。どうやら、これを見せたくて私の帰りを待っていたみたいだ。

「今度はなにを発明したんですか」

「題して幸福の枕です」

受け取ってまじまじと見てみるが、それはとりたてて変わったところはない普通の枕だった。

「これは、枕ですか？」

「ええ、人生を充実させてくれる枕です」

「いったどんなものなんですか？」

「それはつかってみるのが一番でしょう。よろしかったら差し上げましょう」

「ただいま」

ネクタイをはずしながらリビングに入ると、キッチンではちょうど妻が夕飯をつくっているところだった。

「おかえりなさい、あらなにその紙袋」

「ああ、ハカセに発明品もらっちゃったよ」

妻は、また？と笑った。

「なんでも人生が充実する枕らしいよ」

ふーんと妻は気のないあいづちをうった。幸福の枕にあまり興味はないらしい。

「あ、ごはんもうちょっと待ってくれる？」

妻はせわしなくキッチンで働いている。鼻歌を奏でながら皿に料理を盛り付けしているところだった。

私とその様子を眺めていたら、それに気づいて妻は、なぁに、と笑った。

「冷蔵庫におつまみつくってあるから先にいっぱいやってて」

冷蔵庫からつまみとビールを取り出す。

つまみはトマトとモッツァレラチーズのサラダ、私の好物だった。

テーブルにつまみとビールを置き、ソファに座る。同時にテレビの電源を入れた。ちょうど日本シリーズをやっているところだった。

その様子を見て妻が言った。

「なんだか、ザ・お父さんって感じね」

「ザ・お父さん？」

「うん。ビール片手に野球観戦」

「ああ、そういえばそうだな。ザ・昭和の父親。ちょっとおつまみがハイカラだけどね」

「ハイカラって」

私の言葉がよほどおかしかったのか、それからしばらく妻はハイカラハイカラと楽しそうに笑っていた。

トマトとチーズを一緒にほおぼる。サラダは相変わらず美味しかった。

妻の手料理を待つ間、テレビを眺めていた。

テレビのなかではパ・リーグの打者がヒットを打っていた。

幸せだな。

そう思ったときだった。

胸が苦しい。気づいた次の瞬間、我慢ができないほどの痛みが襲ってきた。

こらえきれず手にしていたビールのグラスを落としてしまう。グラスの割れる耳障りな音で妻が気づいた。

「どうしたのあなた」

大丈夫、とこたえようと思うのだけれど、のどに力が入らず、ただ息が漏れるだけだった。

「あなた」

妻の悲壮な声が聞こえてくる。

死ぬのかな。私はそう覚悟した。

「あなた大丈夫？うなされてたわよ」

目を開けると、そこには心配そうに見つめる妻の顔があった。

また、あの夢だった。

ハカセにもらった枕をつかうといつもこの夢を見る。詳細はそのたびに違うのだけれど、大まかなあらすじはいつも一緒。

心の底から幸せだなと感じて、そして自分が死んでしまうという夢。

それが本当の現実と区別がつかないほどリアリティをもって再生される。

どうやら妻も、原因が枕にあるらしいと気づいているようだ。

「ハカセに返してくれば？その枕。失敗作でしたよって」

口調はふざけたようにしているが私の身を心配してくれているのを感じる。

「大丈夫だよ」

私は妻の頭を抱き寄せた。

「愛してるよ」

ほとんど無意識に口から出ていた。

それを聞いた妻は、なに言ってるのと照れた様子で朝食の支度のためにベッドからでていった

。

今ある幸せがいつまでも続くとは限らない、明日にもそれは終わってしまうかも知れない。それを気づかせる。

人生を充実させる枕とは結局そういう仕掛けだった。

やり口は強引だけれど、確かに効果はある。だから月に一回こうしてこの枕をつかって寝ることにしている。

ただ、妻をあまり心配させるのもかわいそうだ。夢の内容がもうすこしマイルドにならないかハカセに相談してみよう。

「はぁ」

隣にすわるサトウからため息が聞こえてきた。

「どうしたんだサトウ」

タナカが心配して声をかける。

「それがですね」

周りをうかがうようにしてサトウが言った。

「妻がひどいんです」

「何だ？のろけ話か」

「のろけ話なんてとんでもない。本当にひどいんです」

「なにがいったいどうひどいんだ」

タナカの問いかけにサトウは言いよどんだ。家庭のいざこざを話すのはさすがに気が引けるのかもしれない。だが、声を小さくしてサトウは妻の悪口を言い始めた。

「最近朝ちゃんと起こしてくれないんです。それにですねお弁当もちょっと手を抜くようになってしまって。もう嫌いになりそうですよ」

聞いて損した。やはりのろけか。投げやりにタナカは言う。

「びしっといっちゃえばいいじゃん」

それが、とサトウは肩を落とした。

「怒らすと怖いんです」

タナカはすでに興味を失っているがサトウは滔々と続けた。

「この前も包丁もちだしたし……」

サトウの妻に対するグチは延々と続いた。

これ以上ほっとくとずっと続いてしまうかもしれない。

「わかったわかった。おまえが奥さんに文句があるのは十分にわかった。だから、俺が何とかしてやる」

「え、本当ですか」

「とりあえず、奥さんに会わせろ」

「先輩、奇遇ですね」

待ち合わせ場所の喫茶店に入ると、すぐにサトウが声をかけてきた。

わざとらしすぎないか？

心配になってサトウの奥さんを見る。

奥さんは心配そうにサトウに目配せをしている。

「会社の先輩のタナカさん」

「どうも奥さん。結婚式以来ですかね」

結婚式という単語でタナカのことをおぼろげでも思い出したようだ、奥さんは笑顔を作り「そ

のせつはどうも」とあいさつをした。

その後、打ち合わせ通りタナカはサトウ夫妻の席に座った。

少し世間話をした後に、サトウが席を外す。その間にタナカが奥さんに仕掛けをするという段取りだ。

「先輩すみません、ちょっとトイレに行ってきます」

サトウがトイレに入ったのをしっかり確認してからタナカは口を開いた。

「サトウくんとは最近どうですか」

「？ 別にふつうですけど」

「そうですか、なら良かった」

「ん、どういうことですか？」

奥さんの声が少し低くなった。たしかに怒ったら恐そうだ。

「いや、良いものを発明したんで、よければ使ってもらうのもおもしろいかなと思って」

タナカは小さな小瓶をカバンのなかから取り出した。瓶の中には白く小さな錠剤が入っている

。

「なんですか？これ」

「ホンネデールっていう薬です。これを飲むとつい本音をいってしまうのです」

「本音を」

「そうです。飲んだ人物の本音を引き出すことができます。ただ……」

「ただ？」

「まだこの薬は開発中でちょっと問題があるんです」

「問題？どういうことですか」

「本音を引き出すことはできるんですが、それが言葉になるときなぜか逆の言葉になってしまうんです」

タナカは奥さんの様子をうかがう。彼女は神妙な顔をしてうなずいていた。疑ってはいない様子だ。どうやら大丈夫そうだ。

この薬、ホンネデールは本音を引き出すことができるそれは本当だ。しかし、本音と逆の言葉を発してしまう、というのは嘘だ。

奥さんには逆の言葉になると嘘を覚えておいて、サトウには思う存分グチを言ってすっきりしてもらおう、それがタナカの計画だった。

「逆の言葉になる……」

「そう、それをしっかり覚えておいて使ってください。口からでる言葉に惑わされないように」

説明を終えたちょうどタイミングでサトウがトイレから戻ってきた。

どうでした？とサトウが目でうかがってくる。

タナカはそれに、大丈夫だ、と目だけでこたえた。

「はい、コーヒー」

食後のコーヒーを妻が出してくれた。

「あ、ありがとう」

礼を言ってコーヒーを飲むと、サトウの口がひとりでに動き出した。

「愛している」

「お弁当いつもありがとう」

「いつも綺麗だよ」

サトウの口から出てくるのは、妻への感謝の気持ち、妻を愛する気持ちばかりだった。

いったい何が起きているんだ？

困惑するなか「俺がなんとかしてやる」という先輩の言葉が脳裡に浮かんだ。

そうか先輩の仕業か。

俺に本音を言わせて妻の機嫌を良くさせようとかそう言うことだろう。

まったく恥ずかしいことをさせる。

でも、どうしたことだろう。

どんどん妻の顔が険しくなってしまうのは気のせいだろうか。

猫のいないペットショップ

ぼくのまわりにはガラスの壁。そして、その周りにはたくさんのお客さん。

最初は視線になれなくて落ち着かったけど、いまではもうそんなことはなくなった。

マナー違反のお客さんがコツコツとガラスをたたく。相手をしてあげてもいいけれど、今日はあまり気分がのらない。わざとらしく寝息をたてて寝たふりをする。そのうちお客さんは興味をなくしてぼくの前から立ち去っていた。

ぼくは郊外のペットショップで暮らしている。

正確にいうと売られているんだけど。

なかなか大きいお店で、ぼく以外の種類の動物もたくさんいる。

ただ猫だけはいない。

そんなことは当たり前だけど。

「わあ、すごいや」

新しいお客さんが来たみたいだ。

入り口の近くにいたのはお父さんと手をひかれた小さな男の子の親子だった。

ペットショップ自体来たのが初めてなのかもしれない。男の子はきょろきょろと物珍しそうにあたりを見回してはお父さんに質問している。

「お父さん、あれはなあに」

男の子の指さした先は一匹の犬だった。

「ああ、あれはイヌだよ」

「イヌっていうんだ。大きいね」

「大きいね。チワワだ」

「ちわわ？」

「あのイヌの種類の名前だよ。イヌにはたくさんの種類があるんだ」

「へえ、すごいね」

男の子の興味はつきない様子。

「お父さん、あれはなあに」

「あれはサルだよ」

視線の先にはゲージに入った猿が、おいしそうにバナナを食べていた。

「すごい！ 器用に食べるね」

「ほんとだね。私たちとは手の構造が違うからかな」

つぎに男の子は少し小さめのケースを指さして聞いた。

「じゃ、これはなあに」

「これはハムスターだ。ネズミの仲間だよ」

「え、これネズミなの」

「ああ、おまえの大好きなネズミだ」

ケースをじっと見つめながら子供が言った。

「お父さん、これ飼いたい」

「ほんとうかい？ ちゃんと我慢できるかい？」

男の子はふくれっ面になって「大丈夫だよ」と言った。

でも、彼には申し訳ないけど、ぼくもお父さんの意見に賛成だ。ハムスターが彼らに買われていけないことをつつい祈ってしまう。

あいかわらず男の子は店内を楽しそうに見回している。お父さんもその様子を見て喜んでいるようだ。

だけど、「ネコはいないの？」ふと男の子がつぶやいたその一言を聞いてお父さんの顔色が変わった。

「ネコ？ネコはいるわけないだろう」お父さんの声が厳しく響く「そんなひどいことを考えてはいけない」

男の子は、ごめんなさいと小さな声であやまった。

声は涙目になっていた。

その後も彼らのウィンドウショッピングは続いた。

怒られて最初のうちはしょんぼりしていた男の子もいろいろな動物を目にするたびにさっきのことを忘れてしまったようだった。目に入るすべての動物に興味を示しては、そのたびにお父さんに質問を繰り返す。

だから、店の一番奥に陳列されているぼくのところに彼らが来たのは、店内に入ってからだいぶたってからだった。

ぼくを一目見て、男の子はこれまででいちばん目を輝かせた。

じーっとぼくを見つめる縦に割れた瞳は、まるですどいナイフのようだ。

「お父さん、これはなに？」

男の子がぼくのことを指さしてお父さんにたずねた。

「ああ」

お父さんはぼくを見上げていった。

「これはヒトという動物だよ」

男の子は興奮しているみたい。しっぽを盛んに振っている。

「なんだかさっきみたサルみたいだね」

「ああ、サルとヒトは親戚みたいなものだからな。だけどヒトはサルよりも賢いんだぞ。信じられないかもしれないけれど、ヒトは数千年前に、私たちの前にこの星を支配していた動物なんだ」

ぼくの目の前でお父さんがニャアと鳴いた。

悪魔に魂を売ってしまいました。

何の比喻でもありません。

悪魔が私の前にあらわれたのはだいぶ前のことです。

私はそのころ漫然と日々を過ごしていました。そして、自分は何もしないのに、幸せそうに流れている世の中を呪っているふざけた人間でした。

「金さえあれば」

何の努力もせず、ただただそう思っていました。

今の私を知っている人ならばびっくりするかもしれません。これは今の会社を設立する前の話です。

悪魔はそんな自分のところへやってきました。

ある雨の日、だれかがアパートのドアをたたく音がしました。ドアを開けると男がいました。

手足、指の数、目鼻口の位置、シルエットどこも人間と変わらないはずなのに、何か寒々しい印象を与える男でした。

「私と契約いたしませんか」

男は唐突にいいました。

契約とはいったい何の話だろうか。私は訪ねてみました。

すると男はとうてい信じられないことを言いました。

契約するとすべてが私の望むようになると。

「信じられない」私はいいました。

するとその男は言いました。

「では試してみますか？」

一日だけ試用期間を差し上げましょう。その日、男はそのまま帰りました。

次の日の出来事は長々と語ることもないでしょう。

男が再びアパートを訪ねてきたとき、私は大金を手にしていました。

「すぐに契約させてくれ」

私は男に頼み込みました。

すると男はどこからか一枚の紙を取り出しました。

契約書でした。

契約書を前にして、男は自分が悪魔であること、契約していただければ望みはなんでも叶うこと、そして契約の対価としてあるものをもらうということを説明しました。

悪魔が私に要求したものの。それは『満足』でした。

今、思えばそこでしっかりと考えていれば、このようなことにはならなかったでしょう。

でも、そのとき私はそれまでに『満足』なんて得たことがないと思い込んでいましたし、前日に得られた大金に目がくらんでしまい契約書にサインをしてしまいました。

悪魔と契約を交わしてから、私の人生は変わりました。

私自身は何も変わらない、それなのに、やることなすことすべてがうまくいくのです。

勤めていた会社では評価されるようになり、まもなく昇進しました。給料もそれまでとは比べものにならないになりましたし、より良い条件を提示して私を引き抜こうとする会社も現れました。

しかし私が満たされることはありませんでした。当たり前のことです。『満足』を取られてしまっているのですから。だけど、そのころの私は甘く考えていました。きつともっと金を稼げば幸せになれる、そう思っていました。

そこで会社を興すことにしました。

会社は順調に成長していきました。すべてがうまくいっていると言ってもうぬぼれではないでしょう。私は莫大な普通の人間ならば使い切るこのできないほどの財産を得ることができました。

だけど、何も得られませんでした。

会社で得た使いきれない大金を使って、慈善事業をやってみたりもしました。そのような事業にはそれまで全く興味もありませんでしたが、人の為になることをすれば何か変わるかもしれないという一抹の希望を持ってやったことです。

「あなたは素晴らしい」

「あなたのおかげで助かった人が大勢いる。ありがとう」

みんな私をほめてくれます。しかし、いくら賞賛されようとも私の心が満たされることはありませんでした。

わたしが得た『満足』はすべて悪魔に支払われていきました。

金を得ても何も感じず、きれいな女性と一緒にいても何も感じず、好物を食べてもおいしいと感じるけれどもただそれだけ。むなしい気持ちだけが残る。

『満足』が欲しい。

私は悪魔を呼び出し、契約を解除してほしいと訴えました。

悪魔との契約は絶対だ。きっと断られるに違いない。

しかし、悪魔の答えは意外なものでした。

「よろしいですよ。ただ、これまで築いてきたものは全て失ってしまいます。それでもよろしいですか？」

私は迷いませんでした。私は悪魔との契約を解除しました。

私に訪れたのは破滅。何もかもがなくなりました。

しかしかわりに『満足』が返って来ました。

それも悪魔と契約してから私が得られるはずだった『満足』がいったんに返って来ました。

心奮えました。

それまでまったく感じる事の出来なかった『満足』を味わうことができるのです。

何をしてもしょくしょうがない。

苦勞して興した会社が倒産してしまっても、最愛の人がいなくなってしまうても、それまで尊敬のまなざしで見てくれて人々がことごとく私のことを軽蔑するようになってしまっても、逆上

した元社員が私を殺そうとしても。

何が起ころうとも私の心は『満足』で満たされました。いつまでたっても『満足』はなくなりませんでした。悪魔と契約していた間に私が得ていたはずの『満足』は相当なものだったようです。

最初は嬉しかったです。だけど、そのうち怖くなりました。『満足』しか得られなくなってしまっていることが。

果たして『満足』だけしか得られないこの状態は『満足』していると言えるのか。

満たされない心があるからこそ『満足』というものがあるのではないか。

そんなとき悪魔がまた現れました。

「どうですか？ご調子は」

「もう、何がなんだかわからないんだ。果たしてぼくは今『満足』しているのかい？」

「もちろん満足していますよ」

「この状態はいつまで続くんだ」

「ご安心下さい。あなたの寿命がおわるまで、あなたの貯めた『満足』はつきることはありませんよ」

そう言って悪魔は笑いました。

ひとみしり克服ロボット

「先輩ちょっといいですか」

タナカが仕事をしていたら、後輩のサトウに話しかけられた。

「どうした浮かない顔して」

「実はいここにやっかいな相談をもちかけられて」

「いどこ？女か？」

「いや男なんですけど」

タナカの興味は目に見えて薄れたが、サトウは続けた。

「ぼくより年上でそろそろいい歳なんですね。だから、結婚したいとお見合いを何度も受けているんですけど、なかなかうまくいかないんです」

「おっさんには興味ないよ」

「そんなこと言わないでくださいよ。原因はわかってるんです」

「わかってるならいいじゃないか」

「そんな投げやりにはいわないでくださいよ」

「なんなんだ原因は」

「原因は人見知りらしいんです」

「人見知り？いい歳した男が何をいってるんだ」

「もともと人づきあいが苦手な人なんですけど、目がだめらしいんです」

「目がだめ？」

「ええ、どうしても目を見て話すことができないっていうんですよ」

「まったくしかたのないおっさんだな。で、それがどうしたんだ」

「そのいところに、お前ロボット研究所につとめてるんだろ、なんか良い方法ないかって相談されて」

「まったくしょうがないおっさんだな」

そういつつもタナカは奥の倉庫に消えた。どうしたんだろうとサトウが思っていると、すぐに何かを抱えて戻ってきた。

「これ使え」

タナカが渡したのはロボットの胸像だった。鉄パイプの骨組みがむき出しで、かろうじてシルエットで人型だとわかる。

だが、一カ所だけイヤにリアルな部品がついていた。それは人間のものと見間違ふほどの腫だった。

「何ですか？これ」

「むかし作ってた受付ロボットの試作品だ。ガワがつけてないからいかにもロボットだけど、眼球部分はしっかり作ってある。見た目もそうだけれど視線の動き方も人間と同じように調整してある。これを練習台にしろ」

サトウは、タナカのぶつくさ文句を言うくせになんだかんだ後輩思いなところが好きだ。

「ありがとうございます！」

「先輩、先日はありがとうございました」

タナカは何のことを言われてるのかすぐには思いつかなかったが、サトウの手元にあるものを見て思い出した。

「それ、役に立たったか？」

サトウのいとこのために渡した受付ロボットの試作品だ。

「結構効果はあったみたいです。いままでよりはずいぶんと話しやすくなったみたいで。でも、肝心なところではうまくいかなかったらしくて」

「ふーん。困ったもんだな」

「なんでも、この前の相手は透き通るような白い肌にロングの黒髪がばちっときまってる、それに圧倒されてしまったらしいんです」

「白い肌に黒髪ねえ」

タナカは、サトウの手元から受け付けロボットの試作品をかっぱらうと奥の部屋に消えた。

夕方、仕事を終えて帰ろうとするとタナカに呼び止められた。

タナカの手には白い肌と黒髪を装備した受付ロボットがあった。

「ありがとうございます！」

「先輩」

タナカが振り返ると、サトウはまた浮かない様子だ。

「またうまくいかなかったのか」

サトウは大きくため息をついた。

「すみません。せっかく改良してもらったのに」

「今度の原因は何なんだ」

「なんでも、今度の相手はすごくスタイルがよかったらしいんです。ロボットのおかげで顔はちゃんと見えるようになったらしいんですけど、いったんそのスタイルを見てしまったが最後、もうグダグダだったらしくて」

「今度は体か。さすがに一日じゃ無理だな」

「え？ひょっとして先輩また改良してくれるんですか？」

「ここまで来たら乗りかかった船だ。やってやるよ」

それから三日後、サトウの手元には現実の女性と見間違えるほどに改良された例のロボットがあった。

「先輩、ありがとうございます！」

それから数週間たったある日、サトウが大きな荷物と小さな荷物をもって入社してきた。

「先輩、受け取ってください。いここからです」

そうやって小さい方の荷物を差し出した。あけてみるとそれは菓子折りだった。

「うまくいったのか」

「ええ、なんでも最高の女性に出会うことができたって喜んでくれました。お礼を言ってくれと」

「そうか、よかったな」

「なんでももう指輪も贈ってしまったらしいです」

「気が早いな。ほんとうに人見知りだったのか？」

菓子折りの礼を言い、タナカが仕事に戻ろうとすると、「ちょっと待ってください」とサトウが大きな包みを差し出してきた。

台車に乗せられたその包みはタナカと同じぐらい大きい。

「なんだ、これ」

「実はいところからお願いがあって」

サトウは言いにくそうに言った。

「いや、なんでも最高の女性に出会えたんだけど、強いて言えば唇の形が好みじゃない、もう少し下唇をプックリとした形になおしてほしいといわれちゃって」

大きな包みを開けると、そこには例のロボットがあった。

ロボットの左手の薬指には大きな指輪が光っていた。

手紙

郵便受けに手紙が届いていた。宛名を見ると高校時代の友人からだった。

このご時世にわざわざ手書きの手紙をよこすなんて。

こいつに最後に会ったのはいつだっただろう。思い返すと、高校を卒業して大学生になって初めての同窓会、それが最後だったような気がする。

同窓会ときのこいつの鈍くさい様子を思い出す。場になじめず、俺が気をきかして話しかけるまでずっとまごまごしていた。

高校で出会ったときから、こいつは一言で言えば鈍くさい、生きるのが下手な感じの奴だった。

郵便受けから手紙と一緒にとりだした夕刊を見る。その一面には手紙の差出人と同じ名前が踊っていた。

あの鈍くさい奴が今や時代の寵児になるなんてな。人生とは不思議なものだ。

封筒を開けると手紙は二枚あった。

久しぶり。

長いこと会っていませんがお元気にはしていますか。

こいつ、意外と綺麗な字を書くんだな。

見た目とは裏腹だ。記憶のなかの奴のやぼったい格好を思い出して少し笑った。

ぼくのことは覚えているかい？

高校時代、ぼくはあまり印象強いほうじゃなかったから、君はひよっとしたら忘れているかもしれない。

ただ、はからずも最近世間を騒がしてしまっているから、きっと君のことだからぼくのことを思い出してくれていることと思う。

確かについ最近までこいつのことは忘れていた。

特に親しいわけでもなかったし、本人の言うとおりに目立つタイプでもなかったから。

だから、テレビで偶然こいつの顔を見たときは本当に驚いた。警察にでも捕まったのならまだしも、そうじゃなかったからなおさらだ。

こいつがまさか日本を代表する経営者になるなんて。

さて、前置きはこれくらいにしよう。

ぼくは今、会社を経営している。

まだ日は浅いけれども経営状態は良好で日本を代表する企業として全世界に認知されるまでになった。

それに結婚もしたんだ。子宝にも恵まれた。

文字通り何不自由ない生活。いや、それ以上だよ。

高校時代のぼくを知っている君からしてみれば、きっと不思議に思うだろうね。

なぜそんなことができたのか、と。

それは一本のペンの力なんだ。

ペン？

いったい、こいつは何の話をしようとしているのだろうか。

それを手に入れたのは旅先でのこと、ある訪れた古びた骨董店に立ち寄ったときだ。

とても胡散臭い感じの店で、普段のぼくなら絶対に立ち寄らない感じの店だった。

だけどそのときは、なぜか立ち寄ってしまったんだ。今思えば運命だったのかもしれない。

そう。運命。

ぼくがそこで手に入れたペンは、運命を引き寄せることのできるペンだった。

きっと君は信じないだろうけれど、このペンで願い事を書けば、それは現実になる。

そのことに気づいたぼくは「金持ちになりたい」と書いてみた。そしたらどうだろう。結果は君も知っての通り。

「運命の女性に会いたい」と書いた次の日には今の妻に出会った。

「人々から尊敬されたい」と書いたらまもなくいろいろな賞を表彰されるようになった。

信じられないだろう？

でも本当なんだ。

背筋になにか寒いものを感じた。

狂っている。

前から変な奴だとは感じていたが、とうとう頭がおかしくなってしまったのだろうか。

たかがペンで書くだけでそんなうまいことが起こるはずがない。ばかげている。

しかしそれよりも、なぜこいつは俺にこんな手紙を送ってきたのだろう。

さて、いよいよ本題に入ろう。

高校時代、実に君はぼくによくしてくれた。

よくぼくをバカにしてクラス中を笑わせていたね。

それにお金もよく借りにきた。今になってもまったく返してくれていないけれども。

大学に入って初めての同窓会の時もそうだ。後から聞いた話だと、彼女に振られたばかりだったらしいね。だからといってその鬱憤を他人にぶつけていいと言うものじゃない。

手紙はそこで一枚目が終わっていた。

二枚目を見るとそこにはこう書かれていた。

ここまで読んでくれてありがとう。

さて、君へのお願いだ。

君にこの世からいなくなしてほしい。

だけど、なぜ自分が死んでしまうのか、ちゃんと理解してほしいからこの手紙を読むまでは生きていてほしい。

それが今のぼくのお願いだ。

そこまで読んだとき、頭の中で何かのはじけたような音がした。

その後、自分の体が地面にたおれこむ大げさな音だけが聞こえた。

時代物のワイン

階段を降りると広い空間が広がっていた。広すぎて奥までちゃんと見えない。天井の低い空間には等間隔に棚が並び、その棚にはぎっしりとワインのボトルが並んでいた。

「すごいですね」

酒好きにしてみれば夢のような光景に圧倒されて、ぼくの口からは陳腐なほめ言葉しか出てこない。

それでもこの蔵の主人は、自慢のコレクションをほめられて笑顔になっている。

とあるバーで出会ったこの主人と意気投合し、ワインをコレクションしていると言うから見に来てみたのだが、それはぼくの想像をはるかに超えるものだった。

「何か飲んでみますか」

「いいんですか？」

自然と声が弾んでしまう。

「ええもちろん。何かお気に召したものはありましたか？」

周りを見回す。どこを見ても目に入ってくるのは高級そうなワインのボトル。いまだかつてこれほどのワインに囲まれたことはないし、おそらくこれからもないに違いない。

「すみません。あまりワインには詳しくないんです。なにかおすすめはありますか？」

正直にそう告げると、逆に主人が質問してきた。

「今お歳はおいくつですか」

「歳ですか？先月三十歳になりました」

ぼくの答えを聞いて、主人は少し奥の方の棚へ向かい、ちょっと探したすえに棚から一本のワインを取りあげた。

丁寧な手つきでボトルをぼくの方へ差しだしラベルを見えるようにした。ラベルにはぼくの生まれた年が記されていた。

「ぼくと同じ年のワイン」

主人は笑顔でうなずき、なれた手つきでコルクを抜いた。コルクを抜いた時のポンと言う音が二人しかいない地下室に響いた。主人はワイングラスにそれを注ぐとぼくに手渡した。

グラスを受け取り、見よう見まねで香りを嗅ぐふりをして、ひとくち口にふくんだ。

なんだこれは！

ワインを口にした瞬間、衝撃が頭を突き抜けた。

口の中では芳醇な香りが次々に押し寄せては、次々に爆発する。それはとどまるところを知らず、まるで生き物のようにならなっていた。口の中はあっという間に強烈な生命力であふれた。

やっとの思いでワインを飲み込みむと、無意識に深い息をはいていた。まったくもって圧倒されてしまった。

「何なんですか？このワインは」

「驚かれましたか」

主人はしてやったりといった顔をしている。

「今までに飲んだどんなワイン、いやどんなお酒よりも刺激的なのにまるで柔らかな光に包まれたような優しさもあって」

あまりの興奮にぼくは早口にそうまくし立てた。

「まあまあ落ち着いて。実はうちのワインにはちょっとした秘密があって」

「秘密ですって？」

「ええ。ラベルに製造年が書かれていますよね」

「ええ、ぼくの生まれた年が」

「うちのワインを飲んだ人は、そのころの記憶、感情を味わうことができます」

「製造年の記憶を味わうことができるのですか？」

「そう。そして、いまあなたが飲んだのは、あなたがお生まれになった年のものです」

つまり、いまワインを飲んで味わったのは、ぼくはいま、生まれたときの記憶、感情を味わったということか。

当たり前だが、当時のことなど全く覚えてはいない。だが、母親の胎内から外界に出てきたときのインパクトはすさまじいものだったに違いない。

少し信じられない話だが、これほどに強烈な生命力を感じたというのもうなずける話ではある。

「すごいですね」

どうやら驚きすぎるとぼくの口からはあ陳腐な言葉しか出てこないようだ。ぼくの言葉を聞いて主人は笑った。

「ありがとうございます。ほかの年のものも飲んでみますか？」

主人の言葉に甘えて、ほかの年も試してみることにした。

さて、いつのワインを飲んでみようか。

迷ったあげく、中学二年生だった年のものをリクエストした。

主人がすぐにボトルを探し出してグラスに注いでくれた。

少し緊張して差し出されたワインを口にする。

口の中に甘くそして切ない味が広がった。鼻に抜ける香りは早春のそよ風に似ている。

それは、ぼくが人生で初めの恋をした年だった。

思いを寄せていたあの娘を思い出す。澄んだ目をしたあの娘はいま何をしているだろうか。

「いかがですか」

主人の声が、遠く甘くそして少し苦い記憶からぼくを引き戻した。

「おいしいです」

記憶の中まで見られてしまったようで、照れながらそう返すのが精一杯だった。

飲んだ人に製造されたときの記憶をよみがえらせる。主人の言ったことは本当だったようだ。

ピリリリリと主人の携帯電話が鳴った。

「もしもし。…ああ、わかった。すぐ行くよ」

電話を終えた主人がぼくにあやまった。

「すみません、ちょっと上に行かなくてはならなくて。すぐ戻りますから、それまでご自由にご

らんになってください」

そういうと主人は蔵から出ていった。

ぼくはお言葉に甘えて地下室を見学することにした。

本当にすばらしいコレクションだった。本数もさることながら、整然と年代ごとに棚が並んでいる。主人の几帳面さがかいまみえる。

いつかはぼくもこんな蔵をもてるようになりたいものだな、と感心しながら見てまわっているとある棚の前でふと足がとまった。

「ん？」

最初は見間違いかと思った。しかし、何度見ても見間違いではなかった。

その棚にあるボトルのラベルにはすべて未来の日付が記されていた。

未来のワイン。

ひょっとして、飲むと未来のことがわかるのだろうか。

自由に見てていいとは言っていたが、飲んでいいとは主人は言っていない。

まさかな。

ぼくは好奇心を抑えきれず、その棚から一本ボトルを取り出した。そのボトルには五年後の日付が記されている。

ボトルからコルクを静かに抜く。できるだけコルクに傷を付けないようにして。

コルクがポンという音と同時に抜けたとき思わず周りをうかがった。周りに誰もいないことを確認する。

静かにワインをグラスに注いだ。

注ぎ終わると、口にする前にコルクをボトルひねり込みもとあった棚に戻した。

果たして五年後のワインはいかなる味がするものか。

いま一度周りを見回してだれもいないことを確認してから、一口ワインをすすった。

「なんだこりゃ」

思わず首を傾げる。

何かの間違いかとグラスの中の液体を照明にすかして見てみてみたが、そこにはしっかりと濃厚な赤い色をした液体が入っている。

どういうことだろうか。

ワインはなんの味もしなかった。

たしかめるように今度は先ほどよりも思い切りよく、ごくごくワインを口にしてみた。

しかし、やはり何の味もしなかった。まるで空気を飲んでいるような感じ。

なんだ、いたずらか。

よくよく考えてみれば未来のワインなんてあるはずがないのだ。

おそらく主人の手の込んだいたずらなのだろう。

やられてしまった。ひょっとしたら隠し撮りされていて、ぼくの様子を見て笑っているかもしれない。

ぼくはグラスに残ったワインをもう一口飲んだ。

不思議だ。水ですらもう少し味がするものだ。何の味もしない。

強いて言えば、ほんの少しだけ寂しい味がする。最初に飲んだ生命力にあふれた生まれ年のワインと正反対の味が。

サトウくんの特別な一日

みんなの様子は朝からおかしかった。

学校に行く途中、少し先にクラスメイトのスズキさんが歩いていた。

あいさつしようと近づいてみると、後ろからではわからなかったのだけど、小さなスズキさんがとても大きな箱を抱えていた。背中にしょっているランドセルよりも大きい。

みるとスズキさんはとても真剣な表情で歩いている。抱えている箱はそうとう重いみたいだ。大丈夫かな。

急いでかけよる。

「おはよう、スズキさん」

「おはよう」

箱が重いだろうに、スズキさんははつらつとしたあいさつを返してきた。

しかし振り向いて、声の主がぼくだと気づくと、スズキさんは一瞬すごく困った顔をした。

「手伝おうか？」

ぼくが箱を持つのを手伝おうとすると、今後はあからさまに迷惑そうな顔をした。

「サトウ君ありがとう。でも大丈夫。箱にはさわらないで」

スズキさんは言うけれど、箱は今にも手から落ちてしまいそうだ。

「でも、すごく重そうだよ」

「うん。でも大丈夫だから」

かまわずぼくは箱を持とうとした。すると、スズキさんはとたんに怒り出してしまった。

「どうしたの？スズキさん変だよ」

「大丈夫だから。箱にはさわらないで。早く行かないと学校に遅れるよ」

スズキさんこそそのペースでは遅れてしまうよと思ったけど、じっとぼくをにらむその目は真剣でしょうがなくぼくは学校にむかった。

お昼休み、校庭でひとしきり遊んだあと、すこし早めに教室に戻ろうとして視聴覚室の前をとおりがかったとき、中で学級委員のヨシダくんが何かをしていた。

「何してるの？ヨシダくん」

部屋に入って声をかけると、ヨシダくんはびくりとして、そしておそるおそる振り向いた。

ヨシダくんのそばにはなにやら荷物がたくさんある。視聴覚室で何かやるつもりなのだろうか。それにしてもたった一人で準備なんてなんて大変だ。

「何かの準備？手伝おうか？」

「いや大丈夫。ひとりでできるから」

ヨシダくんはそう言って、手に持っていたものをあわてて近くにあった箱にもどした。

「でも、こんなにたくさんの荷物、一人じゃ大変だよ」

手伝おうと思って荷物に近づくと、ヨシダくんはあわててぼくの肩を両手でがちっとなつかみ、そのまま入り口のドアのほうまで押しやった。

「手伝わなくていいって言ってるじゃないか、早く教室にもどりなよ」

ヨシダくんがつかんでぼくの肩は指が食い込んで少し痛かった。

「タナカ先生」

職員室でタナカ先生はパソコンでなにか仕事をしているところだった。

「どうしたサトウ」

ぼくの呼びかけにタナカ先生は優しい笑顔でこたえる。

「なんかみんな変なんです」

「いったいどうした」

「なんか、みんなよそよそしい。大変そうにしているから手伝おうとするんですけど、みんな断るんです」

「よそよそしいか。サトウ、むずかしい言葉知っているな」

そう言って先生は笑った。

「心当たりはまったくないの？」

ないです。ぼくがそう言うと先生は驚いたようだった。

「うーん。心当たりはないか」

サトウらしいな、と先生はまた笑った。

「どういうことですか？」

知らないのはぼくだけらしい。

ぼくは知りたくて先生に詰め寄った。だけど先生はいくら質問したって何も話してくれなかった。

「知らないほうが楽しいこともあるんだよ」

最後にぼくの頭をなでながらそう言った。

結局その日はずっとそんな感じで、みんなの様子はおかしいままだった。

それは一日中続き、帰りの会が終わると、ぼく以外のみんなは急いで教室から消えてしまった

。

いったい何だったんだろうか。

ぼくを避けている？

ぼくはいつのまにかいじめられるようなことをしてしまったのだろうか。

しょんぼりして帰ろうとしたところだった。

あわてた様子でヨシダくんが教室に戻ってきた。

そしてぼくの手を引いた。

「ちょっと来て」

ヨシダくんの強い力におどろいて、何も言わないままヨシダくんの後をついていった。

ついた先は視聴覚室だった。

「中に入って」

言われたまま中に入る。

入った瞬間、パパパンと音がなった。びっくりして肩をすくめたぼくにテープが降りかかった。クラッカーのテープだ。

そして壁には紙のテープで豪勢にデコレーションがされていた。

どうしたんだろう。不思議に思っていると拍手の音が聞こえてきた。みんな笑顔でぼくの顔を見ている。

せーの

ヨシダくんのかけ声が続いて、みんなの声が聞こえた。

「お誕生日おめでとう！」

あ

すっかり忘れてた。

そうだった。そういえば、今日はぼくの誕生日だ。

「サトウくん、いつもみんなのこと助けてくれるでしょ。だからみんなお礼がしたくて」

朝抱えていた大きな箱をもってスズキさんが近づいてきた。

「はい。プレゼント」

箱から出てきたのは大きな金メダル。

「私の家でみんなで作ったの。すごく重かった」

そう笑って、スズキさんは金メダルを首にかけてくれた。

おじいさんの思い出

散歩するのが好きだ。暇があればすぐ近くの公園に行く。

すると顔見知りができる。

そんな顔見知りの中に一人のおばあさんがいる。

そのおばあさんは品のいい感じで、同じベンチに座ってなにかを見つめている。

何度か見かけるうちに、向こうもぼくに気づいたようで、このごろでは会うとあいさつをする程度にはなったのだけど、ちゃんと話したことはまだない。

だから、このときが初めてちゃんと話したことになる。

それは雪の降った日だった。

南国育ちのぼくにとって、雪というのは意味もなく楽しい気分になってしまうイベントだ。

だからいてもたってもいられず公園に散歩に行くことにした。

公園は雪が積もりはじめところどころ白くなって来ていた。

雪だるまを作る子供たちでにぎわっているかなと思っていたけれど、降り始めて間もないこともあって子供たちはまだいなかった。

だけど、そんな寂しげな公園に、おばあさんはいつもと同じベンチにいつもと同じように座っていた。いつもと違ったのは雪をよけるために傘を差しているということだけ。

なぜこんな雪の日まで公園に来ているのだろう。自分のことは棚に上げてそう思った。

「こんにちは」

声をかけるとおばあさんは少し驚いた様子で振り返った。ぼくがいることに気づいていなかったようだ。けどおばあさんのほうもぼくの顔を見ると優しい笑顔といっしょに「こんにちは」と返してくれた。

「こんな雪の日にお散歩？」

「おばあさんこそ」

普段ならここで終わって散歩を続けるところだ。

「お隣座ってもいいですか」

おばあさんは腰を浮かせてベンチの端によってくれた。ぼくはそこに座った。

「よくこのベンチにお座りになってますよね」

「あら、もしかして私のファン？」

そう言っておばあさんは笑った。その顔はとてもチャーミングだった。

「いつも何見てるのかなあって不思議だったんですよ」

おばあさんは笑った。

その視線の先には一本の木があった。

立派な枝振りの大きな木だ。

おばあさんはぼそりと言った。

「おじいさんとの思い出の場所なんです」

木を見るおばあさんの目は、まるで愛する人を見ているようだった。

「私の手を引いてよく連れてきてくれたの」

この公園でご主人とよくデートしていたということなのだろう。

「すごく背の高くてすらっとした人でね。ほんとすてきな人だったわ」

昔を思い出してほほえんでいる。その顔はすごく楽しそうだ。

「そのころはこんな立派な公園じゃなかったけどね」

見つめていた先の木を改めて指さして言った。

「でもあの木はその頃からあるの。よく登ったりして怒られたわ」

あの木に登っていたのか。

若い頃のおばあさんはなかなかアグレッシブな女性だったようだ。

その後もおばあさんの思い出話は続いた。おばあさんは終始笑顔だった。

ぼくもたのしかった。おばあさんの楽しさがうつったのかもしれない。

だけど外は雪。さすがに寒くなってきた。ぼくは疑問に思っていたことを口にした。

「でも、こんな雪の日まで来ることはないんじゃないですか？お体悪くしますよ」

おばあさんの表情はふっと寂しそうになった。

「今日は特別な日なんです」

「特別な日？」

「今日はおじいさんの命日なんです」

なんて返せばいいのかわからなかった。

「やあねえしんみりしちゃって」

小さく「すみません」と言った。おばあさんはなんであやまるのと笑った。

「ほんとに突然だったから」

おばあさんはあの木をじっと見つめていった。木を見つめる目が急に寂しそうに見えたのはぼくの気のせいだろうか。

何も言うことができなくて、ただ隣でいっしょに木を見つめることしかできなかった。

そのとき、公園の入り口のほうから男の声がした。

「おーいばあさん」

見ると小柄で白髪のおじさんだった。

どうやらおばあさんの知り合いのようだ。

男性はぼくの顔をいぶかしげにうかがっていたが、おばあさんが事情を説明すると警戒をといた。

「こんなばあさんの話し相手をしてもらって申し訳ないね」

「ばあさんなんてひどいじゃない」

おばあさんは子どものように頬を膨らませた。そしてぼくにそのおじさんを紹介した。

「私の主人よ」

え？ご主人？

たしかさっき命日って言っていたような。

「おじいさんはお亡くなりになったんじゃないんですか」

「ええ、もうずいぶん前にね」

「でも」

ぼくがおじさんを目でうかがうと、おばあさんはいじわるそうに笑った。

「私のおじいさんはね」

今昔スイッチ

「なんすかそれ」

私が今昔スイッチを持っていると、部下のタナカがめざとくそれを見つけた。

「聞いて驚くな。過去を変える装置だ」

胸を張って世紀の大発明を見せた。しかし自分から質問してきたくせにタナカはあまり興味をしめしてこなかった。

まったく、バカにしゃがって。

腹立たしい部下は無視して私は準備を始めた。

とうとう過去に戻る装置を発明することができた。

これで塗り替えるのだ過去を。塗り替えるのはもちろん三十年前。

当時、私にはライバルがいた。

ヤツと私は大学の同期。同じ教授に師事し、卒業後もお互い研究者となりしのぎを削った間柄だ。

私がある賞を受賞すれば、次はヤツがまた別の賞を受賞する。その繰り返し。

ヤツと私の実力に差はなかった。

あったのはほんの少しの運の差。

ヤツが研究者にとってもっとも権威ある賞、マーブル賞を受賞してから私の人生が狂い始めた

。

私はもちろん同期の栄誉をたたえた。しかし、悔しさがなかったと言えは嘘になる。

悔しさをバネにさらに研究に没頭した。

しかし、没頭すれば没頭するほど、私のまわりから友人たちは去っていき、業績もあげられなくなった。そして研究費もなかなかおりにこなくなっていく。

それもこれもマーブル賞を受賞できなかったからだ。

マーブル賞を受賞してさえいれば、こんなところで部下にバカにされているような人間ではないのだ。

「おい」

タナカはわずらわしそうに顔を上げた。

まったく憎たらしい顔だ。

「このスイッチを押すと、私は過去に行く」

「はあ」

「ただ、この装置には若干問題がある」

「どんな問題ですか」

右手の小指で耳をほじりながらタナカが聞いた。

「私がこのまま過去に行くことはできない。行くことができるのは私の精神だけ。過去の自分と今の自分の精神を入れ替えることで過去に行くことができるのだ」

「で、ぼくにどうしろと」

タナカは小指についた耳垢をふっと吹いた。

さすがに腹が立つ。しかし、過去を是正さえすればとなんとかこらえる。

「私の精神が過去に出発すると同時に、過去の私の精神がこの私に移ることになる」

「はあ」

「一年ほど過去に行くつもりだから、その間、昔の私の相手をしてやってくれ」

ええ！めんどくさい、というタナカの声が聞こえたが、私はかまわずスイッチを押していた。

私は過去に戻った。

ライバルがマーブル賞を受賞するちょうど一年前だ。

懐かしさにとらわれそうになった。研究者として一番楽しかった時期。寝食を忘れて研究した日々。

しかし、それに浸っている暇はなかった。

それから一年、わたしはマーブル賞を受賞するために研究に没頭した。過去の未熟な私ではなく、研究者として円熟した私の頭脳を使って研究を行うのだ。

結果は大成功だった。

私はマーブル賞を受賞した。

時の人として様々な称賛を受けた。

これで変わる。やっと解放される不遇の現在から。

私はもう用はない過去から現在に戻った。

「あれ、ひょっとして帰って来ちゃいました？」

過去から戻ってきた私に浴びせられたのはタナカの失礼な言葉だった。

「帰って来ちゃったとは何だ」

タナカの顔にはなぜか残念そうな表情が浮かんでいる。成功者の帰還を喜んでいる顔ではない。

「どうでした？うまくいきました？」

「ああ、大成功だ」

過去が切り替わったのだ、そんなことわかっているだろうに。

「君には迷惑かけてしまったな。ろくなものじゃなかったろう。過去の私は」

「いやあ、実に気持ちのいい人間でしたよ」

タナカ言葉は予想外の言葉だった。

なんだと？マーブル賞もとれなかったような未熟な人間のどこがよかったというのだ。

「そんなこと言ったら何もできなかったろう」

「確かに研究者としてのレベルは、今のぼくよりちょっと上ってところですかね。でもおごらず謙虚でありながらあふれる熱意を持っている。十分に見習うところがありましたよ」

それからひとしきりタナカは過去の私をほめたたえ続けた。

終いには「あの人の下で働けたのは幸せだったなあ」などと言う。

何を言っているのだ。目の前にマーブル賞受賞者がいるというのに。

「何を冗談を言っているんだ。マーブル賞もとれないような人間の何が立派なんだ。私のほうが

立派に決まっているだろう。君は幸せものだな」

私は上機嫌でそう言った。

だが、それからタナカは何も言わなくなってしまった。

ただ冷ややかな視線を私に向けるだけだった。

「コーヒーどうぞ」

パソコンに向かって仕事をしているとマグカップに注がれたコーヒーが差し出された。集中して一仕事終えるこの絶妙なタイミングで出されるコーヒーは毎日の楽しみだ。

ありがとう、とコーヒー淹れてくれたハラダさんにお礼を言って、タナカはコーヒーをひとくち。

「うわ、苦っ、まずっ」

コーヒーのあまりの苦さに思わず大きな声を上げてしまった。ハラダさんに聞こえたかとあわてて周り確かめると、ハラダさんは奥の方に移動していた。幸運にもタナカの声はハラダさんには届いていなかったようだ。

ほっと胸をなでおろしていると、

「先輩、おおげさすぎますよ」

隣に座る後輩のサトウがそう言って笑った。しかし、コーヒーを飲んだサトウの顔はタナカと同じように苦い顔になった。

「確かに苦いですねこれは」

「どうしたんだろうな、これ」

ハラダさんを探すが、コーヒーを配り終えたハラダさんはすでに給湯室に戻ったようで部屋に姿は見えなかった。

「あ、そういえば」

サトウが何か思い出したようだ。

「昨日、ハラダさんに頼まれてコーヒー豆買ってきたんですよ」

「おまえが？何で」

「ちょうど用事で外でるときにコーヒー豆買ってきてって言われて。何でもいいからって」

「いつまでも使えばしらされてるな、おまえは」

「で、適当に入ったコーヒーショップで買ってきたんですけど、今思い返すと店員が変なこと言ってたような」

「変なこと？」

「これは、淹れる人のストレスで味が変わるコーヒーです、って」

「ストレスで味が変わる？」

「ストレスが強いほど苦くなるってことですかね」

「なんだよばかばかしい」

そうですよね、と言ってサトウも笑った。サトウもそのコーヒーショップの店員の話を受持っているわけではなさそうだ。

結局、コーヒーについての話はそこまでになった。

しかし、次の日、そしてまた次の日とハラダさんが出してくれるコーヒーは日に日に苦くなっていった。

「う、今日はまた一段と苦いな」

これ以上は寄せられないと言うほど眉間にしわを寄せてタナカが言う。

「これはちょっと飲めたものじゃないですね」

サトウもつらそうな顔をしてマグカップを机においた。

周りを見てハラダさんがいないことを確認する。

「もしお前が言った話が本当なら、ハラダさん大丈夫か？」

コーヒーが淹れた人のストレスに応じて味が苦くなるという話だ。

「それなんですけどね」

「ん、なんかわかったのか」

「ちょっと噂を耳にしたんです。ハラダさんひどいセクハラをうけてるらしいって」

「まじか。誰にだ」

サトウは顔を上げて部屋の奥の方を見る。サトウの視線の先には係長がいた。

「係長？」

「いや、ぼくもまさかとは思うんですけど」

二人がこそこそと話していると、係長が二人の視線に気づいてしまった。

「なんだ、どうかしたか」

「いや、なんでもありません」

声が少しうわずってしまったが、気づかなかったようだ、係長はそうかと言っただけだった。

その後、係長は身支度を整えると「今から泊まりで出張で明日いないから。あとよろしくな」と二人に告げて部屋を出ていった。

「結局、本当のところ、どうなんですかね」

サトウが言った。係長がハラダさんへセクハラをしているかどうかということだ。

「うーん、わからねえ」

タナカはただそういうしかなかった。

「コーヒーどうぞ」

次の日、またハラダさんがコーヒーを持ってきてくれた。

「ハラダさん、ちょっと」

タナカはハラダさん呼び止めた。

「どうかしましたか」

セクハラを受けているのかどうか、それを聞こうと思った。

「いやごめん。なんでもありません」

でも、聞けなかった。

「変ですよタナカさん」

ハラダさんは笑って去って行ってしまった。

タナカは目の前におかれたコーヒーをにらむ。そして意を決してすすった。

「なんだこりゃ」

思わず大きな声のでた。

「どうしたんですか先輩」

大きな声に隣のサトウが振り返った。

タナカはコーヒーをもう一度すすり、しっかりと味を確かめた。

「甘い。めっちゃ甘い」

それを聞いてサトウもコーヒーをすする。

そして一言「甘いですね」

「いったい何があったんだ？」

「今日係長がいないからですかね」

係長は泊まりで出張だ。だからもちろん会社には来ていない。ストレスの元である人物がいなければ、それで多少気は楽になりはするだろう。

「にしても、こんなに変わるものなのか？」

タナカは腑に落ちなかった。それほどにまでコーヒーの味は昨日までと違う。違いすぎる。

コーヒーの味の謎はますます深まったように思えた。そして、謎は解明されないまま、そのまま退社の時間をむかえた。

タナカが自宅に帰るとすぐ携帯が鳴った。着信を見るとサトウからだった。

「先輩、テレビみてますか」

サトウの声はずいぶんあわてている。

「どうした。いま家に帰ってきたとこだよ」

「テレビすぐにつけてください。ニュース番組」

言われたとおり、テレビをつけてニュース番組にチャンネルを合わせる。

テレビには見知った名前が表示されていた。

係長の名前。

画面のテロップに係長の名前があった。そして名前の前には「被害者」と書いてあった。

混乱しそうな頭をどうにか落ち着けて状況を把握しようとした。

キャスターは淡々とした様子で「速報です。先ほど〇〇市のホテルの一室で変死体が発見されました」と話していた。

殺された。

係長は殺されてしまったようだ。誰かに。

同じニュースを見ていたのだろう、一段落するとそれまで黙っていたサトウがまた話し始めた。

「コーヒーの謎、こういうことだったんですね」

ハラダさんは係長にセクハラを受けていると噂されていた。

そして係長が死んだ。

もし噂が本当ならばストレスもなくなるだろう。

ストレスの元となる人間がこの世から去ったのだから。

今朝のコーヒーがあれほど甘くなっていたのもうなずける。

もう自分を苦しめる存在はいなくなってしまったのだから。

そこまで考えて、タナカはふと寒気を感じた。

「ちょっとまで」

「どうしたんですか」

「なんでコーヒーは甘かったんだ」

一瞬間があった後、電話の向こうで「それは係長が死んでしまっていたからなんじゃないんですか」とサトウが言った。

その声には、何でわからないんですか？というあざけりの色が混じっていた。

タナカは思わず舌打ちをする。なぜ気づかない。

俺たちは今まで係長の事件のことを知らなかった。会社でもそんな話はもちあがらなかった。そもそも、さっきニュースで速報と言っていたではないか。

タナカは額の脂汗を拭った。

「なんで今朝の時点で彼女の淹れたコーヒーがあまかったのかって言ってんだよ」

検索する世界

□□駅から○○駅

検索ボタンをクリックすると乗り換えの情報、運賃、所要時間、などなど必要な情報がすぐに画面に表示された。

結果画面を見ていて、到着時間を設定するのを忘れていたのに気づいた。待ち合わせ時間は午後三時。到着時間を二時四十五分に設定して再検索する。すぐに結果が更新された。

乗り換えの情報が表示された画面を保存して、別の検索画面を立ち上げる。

○○駅 周辺 おすすめグルメ

画面にはレストラン、居酒屋などの情報が瞬時に表示された。

それぞれのお店の情報にはメニューや値段のほか、店内の様子、一押し料理、なかには看板娘などたくさんの写真も掲載されている。

ぼくは詳細検索画面を立ち上げて、追加の条件を入力した。

二回目のデート

数十件あった検索結果は三つに絞られた。

つづけて追加条件を入力。

予算5000円 一人当たり

検索結果は二件。

詳細検索ではこれ以上絞り込むのは難しいだろう。

それぞれお店のホームページを開き、オーナーシェフの名前をクリック。するとシェフのつぶやきが表示された。

つぶやきを見比べてみる。それぞれの人柄はどんな感じだろうか。人柄の良さそうなほうの店を選ぼう。

だが、どちらのシェフのつぶやきもお店の紹介が主でお店を決定することはできなかった。

ぼくは検索フォームにそれぞれのオーナーシェフの名前を入力した。

検索ボタンをクリック。

検索数は15000件と17500件。

検索数が少なかったほうのレストランのホームページを閉じた。

多かったほうのレストランのホームページにあった予約ボタンを押す。日付と時間を入力したら、あとは端末に保存されている情報が送られて、ほどなくして予約完了のメールが届いた。

クローゼットを開ける。着ていく服はどれにしようか。いくつか候補はあるのだけれど、どれもいまいちぴんとこない。

端末のカメラモードを起動して、候補の服の写真を撮る。

撮った写真をアップロードする。アップロード先は候補の洋服の写真から、最適な組み合わせを選び出してくれるサイトだ。

すぐに画面に最適のコーディネートが表示された。

ぼくは選ばれた洋服一式が一番手前になるようにして、取り出した洋服たちをクローゼットにしまった。

デート 二回目 会話

検索の結果には、大手の会話シミュレーションサイトが表示された。

このサイトでは設定したシチュエーションでの会話のシミュレーションをしてくれる。

シミュレーションの精度が高いことが口コミで人気を呼び、最近では会話に望むほとんどの人が使っているらしい。

このサイトで練習しておけば、プレゼン、面接、講演、日常会話、もちろんデートでも、どのような場面の会話でもそつなくこなすことができるようになる。

会話シミュレーションサイトでの練習を始めようとして、思い直して検索画面を立ち上げてあることを調べる。

睡眠時間 デート 前日

検索結果には8時間27分と表示された。時計を見る。

逆算するといまから2時間は起きていても大丈夫だ。

それからぼくはきっちり2時間、シミュレーションサイトで会話の練習をした。

ずいぶんすてきな会話をできるようになったと思う。

明日、デートに誘ったあの子のことを思う。

きっと彼女も一番すてきなコーディネートを検索して、ぼくと同じように会話シミュレーションサイトですてきな会話を練習してくれていることだろう。

見た目はもちろんお似合いで、会話もばつぐんにかみ合うすてきな二人になっているはずだ。

デート 前夜 気持ち

とぼくが検索すると、画面にはただ一言、「楽しみ」と表示された。

その通りさ。

本当にデートが楽しみだ。

サトウとタナカ

<http://p.booklog.jp/book/41675>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41675>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41675>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.